

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：25301
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2016～2020
課題番号：16K12071
研究課題名(和文) 外来がん化学療法を受ける在宅高齢がん患者世帯の治療継続アセスメントシートの開発

研究課題名(英文) Development of a Treatment Continuation Assessment Sheet for Elderly Cancer Patients Receiving Outpatient Cancer Chemotherapy

研究代表者
名越 恵美 (Nagoshi, Megumi)
岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：20341141
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外来化学療法を受ける高齢がん患者への看護介入について、がん治療がどのように患者の生活に影響を及ぼしているのかに着目した。そして、これまでの研究結果から、在宅療養高齢がん患者世帯のQOLの維持と療養生活への適応を図るためのアセスメントシートの試案作成として、病気侵害尺度日本語版を作成し、信頼性妥当性を検討した。その結果オリジナル3因子構造と異なり2因子構造が確認された。また、絆を大切にすアジアの文化の特徴からアセスメントシートを洗練する必要性がある。外来看護においては、治療と生活のバランスや、身体面、心理面だけでなく人間関係といった社会面のアセスメントが重要になることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外来がん化学療法を受ける高齢がん体験者・家族は、介護力や自己管理能力が徐々に困難になる中で、個人単位だけでなく夫婦一組や家庭としての問題やニーズを抱えている。そして、家族の感情の交流から、世帯としてのコーピングを行っている。そこで、治療継続に関する高齢世帯のQOLの維持と在宅療養継続への適応やサポート体制を看護師が、どのように行っているかという問いをを明らかにした上で、終生期における治療継続を支援するためのアセスメントシートを開発する。本研究により、時間的制約のある外来において患者及び家族のニーズに沿った効果的な看護提供ができる。さらに、看護師の臨床判断能力の向上に寄与する。

研究成果の概要(英文)：In this study, we evaluated how cancer and its treatment affect the lives of elderly cancer patients receiving outpatient chemotherapy as a part of nursing interventions. Based on the available data, the Japanese version of the Disease Infringement Scale was prepared as a tentative draft to assess the maintenance of the quality of life of elderly cancer patients under home care and their adaptation to the medical treatments, followed by validating the reliability of the assessment scale. We confirmed that the two-factor structure was unlike the original three-factor structure. Moreover, in ambulatory nursing, the assessment of not only the balance of treatment and life, physical aspects, and psychological aspects but also the social aspects, such as human relations, were noted to be important. Nevertheless, there is a need to refine the developed assessment sheets with respect to the Asian cultural characteristics that value ties.

研究分野：がん看護

キーワード：外来化学療法 高齢がん患者 治療継続 アセスメントシート 病気侵害尺度

1. 研究開始当初の背景

2014年度診療報酬改善重点目標では、在宅医療の充実を充実させるとともに在宅復帰率の導入を重点目標としている。がん看護においても生命予後が延長されることにより、がん体験者は、地域で生活を営みながら通院するスタイルへ変化した。一方、人生の終末期にある高齢がん体験者は、加齢に伴う運動機能・認知機能の低下といった老年期の特徴に加え、化学療法による副作用の出現により、治療計画実施に伴う体調管理や生活スタイルの変更に多くの労力を必要とすることが推察される。以上をふまえた名越らの研究では、高齢者世帯が加齢と治療に伴う身体機能の変化の中でも自律維持、役割維持を希求していたことが明らかとなった。(2015名越他)このことから、地域包括ケアシステムの中でも特に外来看護と在宅看護の継続性を強化する視点は、高齢がん体験者がQOLを維持し、在宅で療養生活を継続するために自己管理支援を行う上で重要な課題であると言える。

日本における高齢がん患者に関する研究は事例研究が多く、治療過程にある高齢がん体験者の「がんと共に生きる」ことへの受けとめ(今井2011)といった心理面を明らかにした研究や、病院から在宅への治療継続を明らかにした研究はみられるが、事例や終末期医療に限局され治療継続の視点がみられなかった。外来がん化学療法の高齢者を対象にした国内の研究は、副作用に対するマネジメント(内山2008)や、感染予防(石川2009)便秘(土田2007)倦怠感(平井2006)といった一つの副作用予防に特化した研究があるものの1クール目の治療終了後、次の治療に向かうといった治療継続のための日常生活の再構築を視野に入れた研究は少なく累積が必要である。さらに、対象を患者個人、もしくは配偶者介護者、高齢者の二世帯と独居の混在といった状況であり、相互交流のある夫婦世帯としてとらえている研究は皆無である。海外における高齢者の外来化学療法に関する研究も同様に疼痛管理や神経障害といった副作用に対するマネジメントやオンコロジーNSによる看護介入の研究はあるが治療準備・維持のための日常生活の再構築に言及した研究は見られなかった。高齢がん患者世帯の研究は、配偶者介護者を中心にがん患者と配偶者介護者を一組として見据え、前向きな態度になるための枠組みを明らかにした研究(Q.Li他:2014・2015)や介入プログラム(Q.Li:2015)がみられるがここ数年である。また、高齢者に特化した高齢がん患者の配偶者介護者の苦悩とコーピングを明らかにした研究(G.Goldzweig:2012)では、高齢がん患者と配偶者は相互作用があり身体面・精神面への影響を世帯として対処しているものの、コーピング方法や受け入れに性別の特徴があることを明らかにしているが世帯を対象としていなかった。

本研究により外来看護師・訪問看護師が、外来がん化学療法を受ける高齢在宅療養世帯のニーズに沿ったアセスメントをもらすことなく実施し、高齢がん在宅療養世帯が地域で望む生活を送りながら治療を継続する一助となる。そして、住み慣れた場で安心して自分らしい生活を全うすることができるようになる。また、時間的制約のある外来において効果的な看護提供を行うための示唆を得ることができる。さらに、今後増加が予測される高齢者夫婦世帯、独居世帯の患者が体調管理や生活スタイルを再構築するための一助になると考える。

2. 研究の目的

本研究は、在宅高齢がん患者世帯が治療を継続するための特徴的な心理や生活調整やを明らかにしたうえで、生活の再構築に必要なアセスメントシートを開発することを目的とする。

そのため、次の5段階で構成した。

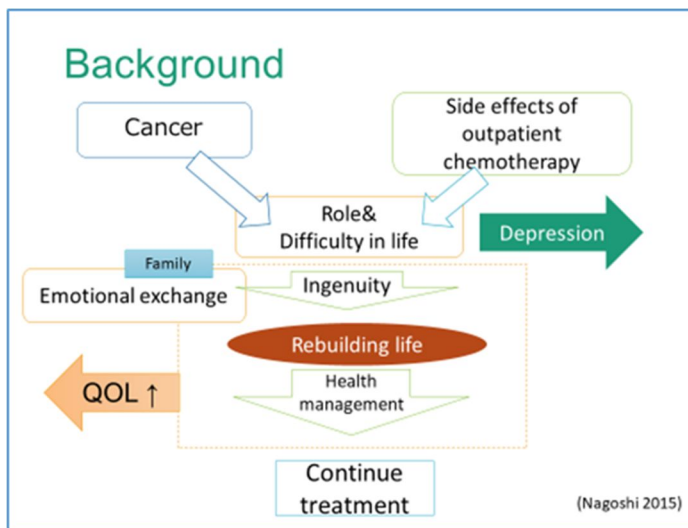
調査1: 外来化学療法を受けるの高齢がん患者のコーピングに影響するレジリエンスに着目し、先行研究から研究の動向と今後の課題を明らかにする。

調査2: 外来がん化学療法を受ける高齢がん患者世帯の生活上の困難と在宅療養の見極めについて外来看護師・訪問看護師に半構造化面接を実施し看護師の知見を明らかにする。

調査3: イギリス・ハンガリーのがん看護に関する治療期から終末期に至る在宅医療の公的支援システムの現状を明らかにする。

調査4: 調査1で明らかになった要素をもとにストレスとなる病気と治療に対する生活上のコーピングを明らかにする。

調査5: 調査1・2・3・4をもとに在宅療養高齢がん患者世帯のQOLの維持と療養生活への適



応を図るためのアセスメントシートの試案作成を行う。

3. 研究の方法

調査1：医学中央雑誌から「がん患者」「レジリエンス」をキーワードに検索し、研究の動向について、発表年、デザイン、対象疾患、治療内容、種類に分類し項目ごとに分析を行った。精神、小児、本研究の目的に相違があるものを除き、研究目的と内容を照らし合わせて精選した16文献について分析を行った。研究内容は本文の内容を精読し、研究目的と内容を照らし合わせ質的にまとめ、類似するものを集約した。

調査2：外来がん化学療法を受ける高齢がん患者世帯の生活上の困難と在宅療養の見極めについて訪問看護師に半構造化面接を実施・調査し看護師の知見を明らかにした。

調査3：英国 Macmillan Cancer Support 本部 (London) 及び提携校であるイギリスバンガー大学に依頼し、イギリスのがん看護に関する治療期から終末期に至る在宅医療の公的支援システムの現状について実態調査を行った。また、ハンガリー国立病院の外来化学療法室及び、在宅移行支援について見学した。

調査4：外来化学療法を受ける在宅療養高齢がん患者世帯の QOL の維持と療養生活への適応を図るためのアセスメントシートの試案作成として、病気侵害尺度日本語版を作成し、信頼性妥当性を検討した。パイロットスタディの後、がん患者外来化学療法を1クール以上受けている在宅療養中のがん患者100名に、自記式質問紙を配布してもらい、郵送法にて回収した。質問内容は、患者の属性と症状、病気侵害尺度日本語版を用い、7段階リッカートスケール(1-7)の回答を使用した。QOLはFACT-G第4-A版を用い、5段階リッカートスケール(0-4)の回答を使用した。分析は、確認的因子分析を実施した。その後本調査を実施した。対象は、外来化学療法を1クール以上受けている在宅療養中のがん患者657名。データ収集方法は、外来化学療法室を持つ施設の看護部長に研究の趣旨を説明し同意を得た後に、外来化学療法室の看護師から対象者へ自記式質問紙を配布してもらい、郵送法にて回収した。分析は、記述統計及び二乗検定を行った。

調査5：在宅療養高齢がん患者世帯に対する外来看護師のアセスメントシートの試案作成を行う。

4. 研究成果

調査1：外来化学療法を受ける患者に対する先行研究において、研究デザインは、質的研究16件と多かった。疾患では乳がん10件と最も多かった。治療内容では手術療法が7件と最も多かった。内容は、悔いのない自分らしさ 周囲からの支援によって強化 変動性のある力 肯定的未来志向 治療継続への動機づけ 困難を乗り越える力 ポジティブな変化 価値観の尊重 治療の意味、意味ある生活の維持 の9つに分類された。がん患者のレジリエンスは、意味のある日常生活へのポジティブな変化をもたらしていた。しかし、治療に特化した研究は見られなかったことから、化学療法に特化したレジリエンスの特徴を探索する必要があることが明らかになった。

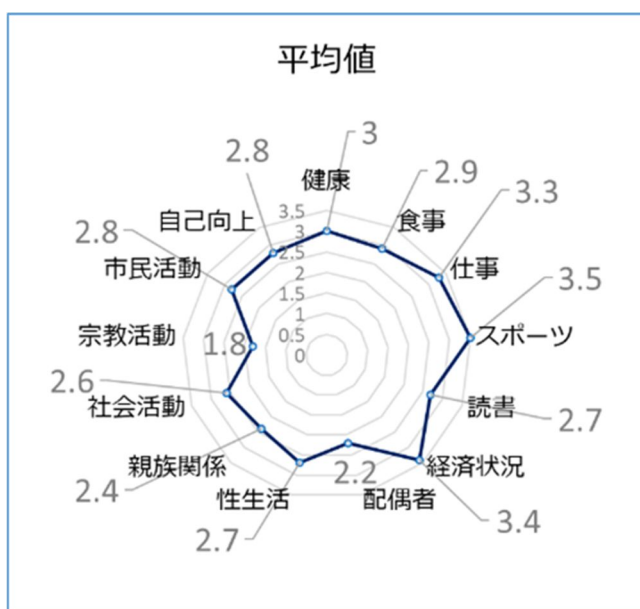
調査2：外来がん化学療法を受ける高齢がん患者世帯に関わる訪問看護師の基本属性は、年齢46～60歳、女性6人であった。臨床経験年数は8～38年、訪問看護経験年数は7～20年であった。訪問看護師の家族支援の構造として、【在宅療養継続に向けた介護力の把握】【多職種連携による情報共有・方向性の統一】【療養者・家族に対する看取りの意向確認】【日々の在宅介護が続けられる状況に導く】【医療職者不在の療養生活における家族への安心感の提供】【遺される家族の糧となるよう療養生活の中での希望を叶える】の6カテゴリーであった。また、臨死期での支援では【臨死期の告知に向けて医師と連携し、タイミングを計る】【家族が納得するための臨死期の説明方法を工夫する】の2カテゴリーであった。そして、療養者の死後の支援は【遺族の思いを聞く機会を設ける】【遺族の思いを受け止める】の2カテゴリーが抽出された。訪問看護師は、専門性を発揮し、利用者の療養生活支援を行うと同時に介護者となる家族の全人的サポートを実施していた。

調査3：英国 Macmillan Cancer Support では、2大事業として、高齢者がんサービスと病院と組んでより良い看護の提供を行っていた。また、政府、病院、かかりつけ医などと患者の橋渡しを行っていた。治療が終わった後のリハビリ方法を患者と共に考えることも重要なチームの業務であった。さらに Croydon Health Services (Croydon University Hospital) 病院内見学と共に、IVR室の看護師4名と情報交換、化学療法室の看護師3名と情報交換した。その後、バンガー大学看護学科の実習病院のホスピス(コンウエイ)を見学した。80%がチャリティ、20%をNHSで運営されており、チャリティは資金源として重要であった。また、希望者が多いため順番を待つ場合にはケアホームや在宅での看護を大切にしていた。特に文化を象徴するものとしてのウエールズ語及び家族の絆を尊重していた。ホスピスとしてデイサービスも提供しており、常時8名から10名の参加者がいて、サロンで時間を過ごしていた。さらに、地域の看護師を対象にバンガー大学と協力して緩和ケアの科目単位が取れるように病院で授業を開催して

いた。その後、看護教育の現状及びがん看護に関するカリキュラムの説明を受けた。がん看護は、慢性疾患の看護内に数時間位置付けられているため講義時間数は少ない。治療関連講義は共通項目として独立していた。今後は、看護師がある一定の範囲内、例えば化学療法中の副作用の一つである嘔気に対する薬剤の処方などできるような資格になるため薬理学の単位数が増加すると思われる。ハンガリー国立病院においては、国のシステムに準拠し看護を展開しており、専門病院同士の連携が取れていた。

調査4：外来化学療法を受ける在宅療養高齢がん患者世帯のQOLの維持と療養生活への適応を図るためのアセスメントシートの試案作成として、病気侵害尺度日本語版を作成し、信頼性妥当性を検討した。その結果オリジナル3因子構造（人間関係と自己啓発、親密さ、道具）と異なり2因子構造（つながり・絆、日常生活）が確認された。（GFI = .87、CFI = .99、RMSEA = .027）、内部一貫性（つながり・絆： = .92；日常生活： = .92）合計スコアは非常に良好であった（ = .93）。サブスケールの許容範囲内であった（ = .52-.77）。

本調査の結果は、回収数233名（回収率35.5%）、平均年齢66.6歳（34-91歳）であり、療養生活への自信有は192名（82%）、生活の工夫有は110名（61.4%）であった。自覚症状は、手足のしびれ118名、倦怠感104名、吐き気・嘔吐39名他であった。FACT-Gの身体状況、社会・家族との関係、精神的状態との有意差は無かったが、倦怠感及び同居家族と活動状況には $p < 0.05$ で有意差が見られた。この結果より、対象者のQOLは、副作用への悩みや動けないほどの状況はないものの、身体症状の中でも特に倦怠感がQOLに影響を及ぼしており、これは、倦怠感による活動制限によるものと考えられる。また、症状に関わらず周囲との関係性は概ね良好であり、精神状態は前向きであった。属性との関連では、同居家族と活動状況のQOLに関連があり、家族が患者のサポーターとして、気持ちや行動面を支えることでQOL維持向上に影響する可能性がある。



活動制限によるものと考えられる。また、症状に関わらず周囲との関係性は概ね良好であり、精神状態は前向きであった。属性との関連では、同居家族と活動状況のQOLに関連があり、家族が患者のサポーターとして、気持ちや行動面を支えることでQOL維持向上に影響する可能性がある。

IIRS-Jの平均値は、気持ちの健康3.0、食事2.9、仕事3.82、スポーツ3.5、読書などの余暇活動2.7、経済状況3.4、配偶者との関係2.2、性生活2.7、親族関係3.07、社会活動2.6、宗教活動1.8、市民2.8、自己向上2.8であった。二因子構造においては、日常生活因子は3.28、つながり・絆因子は3.50であった。自信・工夫との有意差は無かったが、手足のしびれ及び倦怠感とIIRS-Jに $p < 0.05$ で有意差が見られた。これらの結果から身体症状の中でも特に手足のしびれや

倦怠感が生活に影響を及ぼしており、しびれによる細かい作業への困難や倦怠感の活動制限によるものと考えられる。生活の工夫の自覚がないことも推察されるため、工夫となりうるものをフィードバックすることにより自信も強まると考える。また、つながり・絆因子は、生活への影響が低かったが、これらは対象者の年齢分布が高齢者に偏っている影響も考えられる。

調査5：病気侵害尺度日本語版をアセスメントシートとして活用できるが、絆を大切にするアジアの文化の特徴を踏まえた内容を加えるなどアセスメントシートを洗練する必要がある。また、外来看護においては、一定の期間を外来通院するため、治療と生活のバランスについての患者及び家族の認識といった分配に関する内容を加える必要がある。さらに、身体面、心理面だけでなく、人間関係といった社会面のアセスメントが重要になることが示唆された。外来化学療法室においては、アセスメントシートを使用して包括的に患者及び家族の状況を迅速に理解した上で、看護介入へつなげることが可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 門倉康恵, 名越恵美	4. 巻 第30巻
2. 論文標題 外来化学療法を受けているがん患者にかかわる看護師の意思決定支援プロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 吉備国際大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 名越恵美, 犬飼智子, 明治詩穂, 藤谷史麻, 吉井菜摘	4. 巻 第26巻
2. 論文標題 放射線・化学療法を受ける頭頸部がん患者の治療からの自己回復の体験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山県立大学保健福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山形真由美, 名越恵美, 難波峰子	4. 巻 第26巻
2. 論文標題 医療処置を担う高齢介護者の在宅介護継続を支える訪問看護師の看護実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山県立大学保健福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 名越恵美, 松本啓子	4. 巻 第2巻1号
2. 論文標題 イングランドのMacmillan Cancer Support におけるがん看護実践と教育に関する視察報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡山県立大学教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 未季, 藤井 俊子, 湯村 智子, 名越 恵美	4. 巻 17巻1号
2. 論文標題 がん患者に対して緩和ケアに関する要望を聴取する際の看護師の困難感と対処	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門倉康恵	4. 巻 17巻1号
2. 論文標題 A病院で外来化学療法を受けた後期高齢がん患者に対するGeriatric Assessment(GA)ツールの後方視的検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤康恵, 名越恵美	4. 巻 16巻2号
2. 論文標題 がん患者のレジリエンスに関する研究の概観ー国内文献からの検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山形真由美, 名越恵美	4. 巻 16巻3号
2. 論文標題 看護の実践知に関する文献検討 近年の国内文献から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津間文子, 名越恵美	4. 巻 9巻1号
2. 論文標題 育児と介護を同時に担う母親の体験 エンドオブライフにおけるダブル・ケア支援	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 キャリアと人生観	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤康恵, 名越恵美	4. 巻 26巻2号
2. 論文標題 がん化学療法中の患者がレジリエンスを発揮していく過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 Feeling of difficulty of nurse working for county hospital in Japan.
3. 学会等名 International Council of Nursing Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 名越恵美, 吉田雄太
2. 発表標題 在宅看取りを支援するための多職種連携と管理体制に対する気がかり
3. 学会等名 第23回日本管理学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本啓子, 伊東美佐江, 名越恵美
2. 発表標題 在宅療養高齢者の家族介護者の最期に向けた同居での介護の在り方への思い
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 名越恵美
2. 発表標題 終末期がん患者の意思決定を支える看護師の退院調整に関する国内文献の検討と今後の課題
3. 学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 名越恵美, 門倉康恵
2. 発表標題 二次医療圏域の地域病院における看護師のがん看護に関する文献研究
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 名越恵美
2. 発表標題 浅いセデーションを受けるがん患者・家族に対する緩和ケア病棟看護師の介入
3. 学会等名 日本緩和医療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 Post-Treatment Self-Healing Process in Survivors with Head and Neck Cancer. International Conference on Cancer Nursing
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Keiko Matsumoto, MegumiNagoshi
2. 発表標題 Literature review about Family caregivers and regional cooperation of elderly people with dementia at home
3. 学会等名 the 5th CJK Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 名越恵美, 津曲真弥, 松本啓子
2. 発表標題 治療期のがん患者へのケアに関する地域病院看護師の困難感
3. 学会等名 第49回日本看護学会 ヘルスプロモーション 学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門倉康恵
2. 発表標題 A病院で外来化学療法を受けた後期高齢がん患者に対するGeriatric Assessment(GA)ツールの後方視的検討
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 名越恵美, 大浦まり子, 山形真由美, 難波峰子
2. 発表標題 在宅看取りを支援する訪問看護師の介入に関する分析
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山形真由美、名越恵美
2. 発表標題 医療処置を必要とする高齢療養者を介護する配偶者介護者の困難感
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 名越恵美
2. 発表標題 日本語版病気侵害尺度による外来化学療法を受けるがん患者の特徴
3. 学会等名 第22回日本緩和医療学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Megumi Ngoshi, Yuka Terashita, Mika Okuda
2. 発表標題 Support of Nurses Providing Telephone Consultation Service to Cancer Patients
3. 学会等名 APHC2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mika Okuda, Megumi Ngoshi, Yuka Terashita
2. 発表標題 Trend and Future Challenges of Japanese Nursing Studies on Families of Patients with Liver Carcinoma
3. 学会等名 APHC2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 名越恵美, 門倉康恵
2. 発表標題 二次医療圏域の地域病院における看護師のがん看護に関する文献研究
3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 名越恵美
2. 発表標題 在宅看取りを成し遂げた事例に関するサポート要因の分析
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山形真由美, 名越恵美, 難波峰子
2. 発表標題 医療処置を必要とする高齢療養者の在宅療養継続に関する訪問看護師の実践知
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 Case Study : Effects of Discontinued Treatment for Refractory Lung Cancer Survivor
3. 学会等名 EAFONS2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 外来がん化学療法を受けるがんサバイバーと家族の体験
3. 学会等名 The 3rd ASIA FUTURE CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 An Experience of Young Adult Cancer Patient Receiving Outpatient Chemotherapy at Home
3. 学会等名 The 3rd KOREA-JAPAN Conference on Community Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 The Experience of an Elderly Cancer Survivor Couple Undergoing Outpatient Chemotherapy
3. 学会等名 ICCN2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 名越恵美, 平松貴子, 小日向文子, 遠藤康恵, 山下睦子
2. 発表標題 外来化学療法を受けるがん患者の療養生活への影響
3. 学会等名 第26回日本緩和医療学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi
2. 発表標題 Study on Mental health of Patients receiving Outpatient Chemotherapy Abstract Number
3. 学会等名 The 22th World Congress of Psycho-Oncology & Psychosocial Academy (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi Nagoshi, Takako Hiramatsu
2. 発表標題 Factor structure and reliability of the Japanese version of the Illness Intrusiveness Scale: Focus to Japanese cancer patients
3. 学会等名 the 5th Asian Oncology Nursing Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	難波 峰子 (Namba Mineko) (20461238)	関西福祉大学・看護学部・教授 (34525)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	掛橋 千賀子 (Kakehashi Chikako) (60185725)	姫路大学・看護学部・教授 (34534)	
研究 分担者	松本 啓子 (Matsumoto Keiko) (70249556)	香川大学・医学部・教授 (16201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	遠藤 康恵 (Endo Yasue)		がん化学療法認定看護師
研究 協力者	平松 貴子 (Hiramatsu Takako)		がん看護専門看護師
研究 協力者	門倉 康恵 (Kadokura Yasue)		がん化学療法認定看護師

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関